

F-7 イタリア語由来の借用語における母音長受け入れと位置の非対称性*

田中 真一 (神戸大学)
tanaka-s@lit.kobe-u.ac.jp

1. はじめに

イタリア語から日本語に入った借用語の研究は、おもに二重子音（促音）の分析に焦点が当てられ(田中 2007, Tanaka 2015, Ooigawa 2014, Morimoto 2015, etc.)、それ以外の要素についてはあまり検討されて来なかった。このため、音韻要素間の関連についての検討はほとんどされていないのが現状である。

本稿では、イタリア語から日本語に入った借用語におけるとくに母音長受け入れの分析を通して、そこに原語の強勢と受け入れ言語（日本語）のアクセント規則を反映した位置の非対称性が見られることを報告する。また、このことが、子音長受け入れの方策と共通することを指摘するとともに、非対称性の生じるメカニズムについて、最適性理論(Prince & Smolensky 1993/2004)の枠組みから説明を試みる。

2. 問題の所在: イタリア語の音韻構造

イタリア語は母音長の音韻的対立を持たず、長母音は、一般に語末を除く強勢開音節においてのみ生起する。次語末音節への強勢がデフォルトで、全体の約 8 割がその位置に置かれるのに対し、語末 3 音節目への強勢が十数%、語末音節が数%、語末 4 音節目がごく僅かに生起するとの報告がある(Borrelli 2002)。とくに、次語末音節が尾子音を伴う閉音節、すなわち、重音節の場合、(1)のようにほぼ例外なくその音節に強勢が置かれる(Krämer 2009)。閉音節内の母音は、強勢の有無にかかわらず短母音として生起する。

- | | | | |
|-------------------------------|----------|--------------------------|-----------|
| (1) a. San Marco /san.már.ko/ | ‘サンマルコ’ | Vivaldi /vi.vál.di/ | ‘ヴィヴァルディ’ |
| scampi /skám.pi/ | ‘手長エビ’ | Verdi /vér.di/ | ‘ヴェルディ’ |
| b. Giovanni /dʒo.ván.ni/ | ‘ジョヴァンニ’ | vapoletto /va.po.lét.to/ | ‘水上バス’ |
| carpaccio /kar.pát.tʃo/ | ‘カルパッチョ’ | Scarlatti /skar.lát.ti/ | ‘スカルラッティ’ |

上記に対し、次語末が開音節の場合、強勢位置の予測が若干困難になるが、強勢開音節内の母音は語末を除き(2)のように義務的に伸張し、長母音（重音節）を形成する(Marotta(1985), Canepari(1992))。¹

- | | | | |
|---------------------------|---------|--------------------------|-------|
| (2) a. amore /a.móː.re/ | アモーレ（愛） | Verona /ve.róː.na/ | ヴェローナ |
| cantata /kan.táː.ta/ | カンタータ | Puccini /put.tʃíː.ni/ | プッチーニ |
| b. Padova /páː.do.va/ | パドヴァ | opera /óː.pe.ra/ | オペラ |
| balsamico /bal.sáː.mi.ko/ | バルサミコ | basilico /ba.dzíː.li.ko/ | バジリコ |

*本研究は、国立国語研究所研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」、および、日本学術振興会科研基盤研究(B) (課題番号:26284058)、同(C) (課題番号: 16K02629)の助成を受けている。

¹ (2)には便宜上、借用語として入った例を挙げているが、(1)と同様、上記はこの言語全般について言えることである。上記以外の環境（非強勢音節、閉音節、語末音節）では、母音はすべて短母音として生起する。

(2)のイタリア語と借用語とを比べると、イタリア語において長母音が生起する条件下において、日本語化の際、それが(2a)のように長母音として実現される型と、(2b)のように実現されず短母音として生起する型の両方が観察される。本稿では、このような非対称が、原語（イタリア語）の強勢位置と、受け入れ言語（日本語）の借用語アクセント規則の両方によって生じることを、記述・理論両面から説明する。

3. 調査・分析

3.1. データ

『広辞苑』(第 5 版)、『コンサイス・カタカナ語辞典』(第 2 版)、『大辞林』(第 2 版)より、イタリア語から日本語に入った借用語1,001例を抽出した。原語の語末3音節内にある2,795の母音を対象とし、原語-借用語間における母音長と強勢・アクセントとの対応を分析した。まず、イタリア語の音節構造に着目して、強勢がどの程度借用語に受け入れられたかについて確認する。

表1は、イタリア語の次語末音節の種類（開閉音節の別）に着目して、強勢位置が日本語のアクセント位置として継承されたか否かを示したものである。

表1. イタリア語次語末音節の種類と強勢(L2)・借用語アクセント(L1)位置の一致

強勢-ア間の一致	一致	不一致	合計
開音節	479 (80%)	119 (20%)	599
閉音節	349 (86%)	54 (14%)	402
全体	828 (83%)	173 (17%)	1001

全体の 83% (828/1001) という高い割合で、イタリア語の強勢位置と日本語のアクセント位置とに一致が見られる。これは、借用語全般における原語アクセントとの一致度 (69% : 1659/2415 (田中 2008)) と比べてかなり高い値であり、とくに次語末が閉音節の場合に顕著である。これは、日本語の借用語アクセント規則 (3.2 節(4)) と、(1)のイタリア語強勢付与方策がともに音節量に反応するという面において共通することに起因すると考えられる。この点の詳細について、次節で分析する。

3.2. 母音長受け入れにおける位置の非対称

表2は、イタリア語の語末3音節各位置における、開閉音節の別、強勢有無の別、12条件 (3×2×2) に対する、日本語の長母音生起率を示したものである。第2節で確認したように、このうち、語末から3・2番目の強勢開音節（表中「太枠内」）の値が、イタリア語における長母音の生起環境であり、日本語の長母音受け入れ率となる。

表2. イタリア語の開／閉音節、強勢有無と日本語の長母音生起率

伊語 (L2) \ 日語 (L1)	① -3 音節	② 次語末(-2)	③ 語末(-1)	合計
a. 開音節, + 強勢	28% (21/75)	64%(323/508) ²	9% (1/11)	58% (345/594)
b. 開音節, - 強勢	0% (0/430)	2% (3/63)	1% (12/983)	1% (15/1476)
c. 閉音節, + 強勢	0% (0/25)	1% (4/402)	75% (3/4)	2% (7/431)
d. 閉音節, - 強勢	0% (0/291)	---- (----)	0% (0/3)	0% (0/294)
合計	3%(21/821)	34%(330/973)	2%(16/1001)	13%(367/2795)

日本語で長母音を持つ借用語の大半が、太枠内、つまりイタリア語において長母音の生起する音韻構造に由来する (94%: 344/367)。同時に確認すべき点として、イタリア語の長母音すべてが日本語に受け入れられるわけではないことが挙げられる。受け入れ率 (太枠内の合計値) は 6 割弱 (59% : 344/583) である。

さらに重要な点として、長母音受け入れには**明確な位置の非対称**が観察され、原語の次語末強勢開音節に対しては (3a)のように長母音が長母音として受け入れられる (64%: 323/508) のに対し、語末から 3 つ目の強勢開音節では (3b)のように、それが長母音としてではなく、むしろ短母音として借用される型が優勢になる (長母音、短母音の受け入れ率は、それぞれ 28% (21/75)、72%(54/75)である)。なお、(2a,b)の各例もすべて(3a,b)と対応する (括弧内は原語の発音を表している)。

(3) a. 次語末強勢開音節：

ヴェ.ロ'ー.ナ (ve. ró: .na), ア.モ'ー.レ (a.mó: .re), ビ.エン.ナ'ー.レ (bjen.ná: .re),
ス.タッ.カ'ー.ト (stak.ká: .to), カ.リ'ー.ナ (ka.rí: .na), ダ.ル.セ'ー.ニョ (dal.sé: .jo)

b. 語末から3つ目の強勢開音節：

パ'.ド.ヴァ (pá: .do.va), ナ'.ポ.リ (ná: .po.li), バ.ジ'.リ.コ (ba.dzí: .li.ko),
フィ'.ガ.ロ (fí: .ga.ro), メ'.ディ.チ (mé: .di.tʃi), リ'.ベ.ロ (lí: .be.ro)

このような非対称は、イタリア語の強勢位置と日本語の「借用語アクセント規則」とが同時に関与することに起因するものと解釈できる。

東京方言の音節に基づく「借用語アクセント規則」として(4)が知られている (Kubozono 1996)。(5)と(6)はそれぞれ次語末に重音節と軽音節を持つ語例である。なお、本稿での分析の便宜上、(5)を特殊モーラの種類により 3 種 (二重子音(5a), 長母音(5b), 二重母音(5c)) に分類した。

(4) 次語末重音節にアクセントを置く。そこが軽音節の場合、もう一つ前 (語末から 3 音節目) にアクセントを置く。

² (表 2 a②) において長母音が受け入れられない例の大半については、概ね予測可能である。一つは原語末尾に /i: .a/, /ú: .a/ 等の (上昇) 母音連続を含み、その前半の強勢長母音が短母音として受け入れられたもの (e.g. pizzeria /pit.tse.rí: .a/ → ピツ.ツェ'.リ.ア)、もう一つは、次語末長母音を受け入れないことにより、日本語の平板アクセントの生起条件 (4 モーラ、かつ、語末が軽音節の連続(-LL#)) を満たす操作が加えられたものである (e.g. Cremona /kre.mó: .na/ → ク.レ.モ.ナ⁰) (田中 forthcoming)。

- (5) a. ヨー.ロ'ッ.パ、 ピ.ラ.ミ'ッ.ド、 カ.レ'ン.ダー、 バー.テ'ン.ダー
 b. チョ.コ.レ'ー.ト、 ア.リ.ゲ'ー.ター、 シ.リ'ー.ズ、 コ.レ.ス.テ.ロ'ー.ル
 c. アル.バ'イ.ト、 ク.ロ.コ.ダ'イル、 プ.ラ'イ.ム、 ス.ト.ラ'イ.ク
 (6) ド'ラ.ゴン、 エ.ネ'ル.ギー、 ブ.ラ'イ.ダル、 ア'マ.ゾン、 ガ.ラ.パ'ゴ.ス

イタリア語強勢付与との間に対応関係が見いだせる。(5a)はイタリア語において、次語末が閉音節である語の強勢位置(1)と一致し、(5b)はデフォルト強勢の置かれた開音節と音節量(重音節=長母音)との関係(2a)と共通する。さらに(6)は、イタリア語において強勢の置かれない次語末音節が必ず軽音節として実現されることと平行的である。

重要な点として、借用語アクセントの付与される語末3音節目の音節量(母音長)は問題でなく、軽音節(短母音)としても生起可能なのに対し、アクセントの付与される次語末位置の音節量は、義務的に重く(長母音で)なければならないことである。(3a)に関して、仮に次語末が軽音節(短母音)として受け入れられた場合、借用語アクセント規則により、(7a)のように原語と異なる位置を予測することになるし、反対に原語の強勢母音を短母音として受け入れれば、(7b)のように、借用語アクセント規則(6)との間に齟齬を来す。

- (7) a. *ヴェ'.ロ.ナ (ve. ró'.na), *ア'.モ.レ (a.mó'.re), *ビ.エ'ン.ナ.レ (bjen.ná'.re),
 *ス.タ'ッ.カ.ト (stak.ká'.to), *カ'.リ.ナ (ka.rí'.na)
 b. *ヴェ.ロ'.ナ (ve. ró'.na), *ア.モ'.レ (a.mó'.re), *ビ.エン.ナ'.レ (bjen.ná'.re),
 *ス.タッ.カ'.ト (stak.ká'.to), *カ.リ'.ナ (ka.rí'.na)

このような意味で、次語末の強勢開音節は長母音として受け入れなければならないことになる。それに対し、語末3音節目に強勢のある場合、その音節量(母音長短の別)は、アクセント規則に影響を及ぼさない。このように、母音長の受け入れには原語の強勢の情報と、日本語側の借用語アクセント規則の両方が関与すると言える。

以下では、上記の非対称性について、最適整理論(OT)の枠組みから説明する。

4. 最適性理論による分析

上記の非対称性の生じるメカニズムを説明するために、(8)の制約群と(9)のランキングを設定する。

- (8) a. MAX-Head: 出力形における音韻的主要部(強勢/アクセント)は入力と対応しなければならない (Alderete 2003).
 b. MAX-SEG(μ): 入力の分節音(モーラ)は削除されてはならない。
 c. Align-R (Ft, PrWd): フット(Ft)の右端を語(PrWd)の右端に揃える (Kager 1999)。

- (9) 制約のランキング: MAX-Head >> Align-R (Ft, PrWd) >> MAX-SEG(μ)³

³ 分析の中心に大きくは関係しないので詳細については省略するが、MAX-Head の上位に、語末要素(フット)へのアクセントを禁止する制約である、非末端性制約(Non Finality(Ft))が位置する。この制約は、とくに(10)における「ヴェ.(ロ'.ナ)」のような候補の生起を阻止するとともに、原語語末強勢が継承されない「Pietà /pje.tá/ → (ピ'.エ).タ、*ピ.(エ.タ)」などの例も正しく出力させる効果がある。

(10) Verona /veró:na/ → ヴェロ'ーナ (= (2a))

/ve.ró:na/	MAX-Head	Align-R (Ft, PrWd)	MAX-SEG(μ)
☞ a. ヴェ.(ロ'ー.)ナ		*	
b. (ヴェ'.ロ.)ナ	*!	*	*
c. (ヴェ'ー.)ロ.ナ	*!	**	
d. ヴェ.(ロ'.)ナ		*	*!

(11) Padova /pá:do.va/ → パ'ドヴァ (= (2b))

/pá:do.va/	MAX-Head	Align-R (Ft, PrWd)	MAX-SEG(μ)
a. パ.(ド'ー.)ヴァ	*!	*	*
☞ b. (パ'.ド.)ヴァ		*	*
c. (パ'ー.)ド.ヴァ		**!	
d. パ.(ド'.)ヴァ	*!	*	*

上記のタブローについて記述的一般化との関係を示すと、原語の強勢位置を参照しながら適切なフットを形成し、それを語末以外のできるだけ右側に配置し、その構成素内の左側にアクセントを置くということになる。母音長受け入れにおける位置の非対称はフット形成(その右端が次語末音節右端と一致すること)によって生じたと説明できるわけである。

以上のように、分節音、音節構造、アクセント(強勢)がともに関与し、イタリア語由来の借用語の出力形が決定される。

5. 課題とむすび

上記の長母音受け入れと原語強勢との関係は、二重子音受け入れとも共通する。イタリア語の二重子音は、デフォルト強勢の置かれた次語末音節においてもっとも日本語に受け入れられやすく、とくに、日本語において通常許容されない二重流音も、その条件下においては、相対的に高い割合で受け入れられる（なお(12b)は、非強勢音節において二重子音が受け入れられない例である）（田中2007, Tanaka forthcoming, etc.）。

(12) a. tagliatelle /taʎ.ʎa.tél.le/ → タ.リ.ア.テ'ッ.レ、 villa /víl.la/ → ヴィ'ッ.ラ

b. allegro /al.lé:gro/ → ア.レ.グ.ロ (*アッ.レ'.グ.ロ)、
pizzicato /pit.tsi.ká:to/ → ピ.チ.カ'ー.ト (~ ピッ.チ.カ'ー.ト)

このことは、二重子音の受け入れと、長母音の受け入れとが平行的であることを示している。具体的には、原語強勢と借用語アクセント規則をともに満たし、当該音節を重くするという要請により、独自のplaceを持たない特殊モーラ（促音と長母音）が受け入れられていること、反対に、それらの条件から外れた場合は、二重子音・長母音の受け入れは義務的ではないことを示している。このように、音節量全体に関する受け入れ方策とL2/L1間の強勢・アクセントとの関係についての分析、および他言語との関係について、詳細に検討する必要がある。

また、借用語の受け入れに対して、L1がL2の強勢やアクセントの情報を参照する点については、いくつかの研究で論じられており、日本語からイタリア語への借用語においても観察される。イタリア語は、日本語由来の借用語に対し基本的に自言語のデフォルト強勢

を付与して受け入れ、開音節の場合は長母音化させるのに対し (e.g. すも'ーとり (相撲取り) → su.mo.tó:ri)、原語の語末が高ピッチを伴う重音節の場合に限り、その位置に強勢を伴う短母音として受け入れる (e.g. てんりきょう⁰ (天理教) → ten.ri.kjó, *ten.rí:.kjo) (田中 2016)。これらのことは、借用語の形成に知覚が関係することを示唆している。

借用語一般において、上記のような韻律と分節音の受け入れとがどのような関係を示すか、他言語の例をもとに整理することも、今後の課題である。

<引用文献>

- Alderete, John. 2003. Head Dependence in Stress-Epenthesis Interaction, in John McCarthy (ed.), *Optimality Theory in Phonology*. Oxford: Blackwell Publishing, 215-227.
- Borrelli, Doris. 2002. *Raddoppiamento Sintattico in Italian: A Synchronic and Diachronic Cross-Dialectal Study*. London-New York: Routledge.
- Canepari, Luciano. 1992. *Manuale di pronuncia italiana* (Manual of Italian Pronunciation). Bologna : Zanichelli.
- Kager, René. 1999. *Optimality Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Krämer, Martin. 2009. *Phonology of Italian*. Oxford: Oxford University Press.
- Kubozono, Haruo. 1996. Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation, *The Bulletin (Phonetic Society of Japan)* 211, 71-82.
- Marotta, Giovanna. 1985. *Modelli e Misure Ritmiche: la Durata Vocalica in Italiano*. Bologna: Zanichelli.
- 松村明 (編) 1995.『大辞林』 (第2版) 東京 : 三省堂.
- Morimoto, Maho. 2015. Degemination in Japanese loanwords from Italian. Paper presented at GemCon 2015, Glasgow.
- Ooigawa, Tomohiko. 2014. Discrepancies among Japanese loanword adaptations of Italian and Spanish liquids and the perceptions. Paper presented at the Phonology Forum 2014, University of Tokyo.
- Prince, Alan and Paul Smolensky. 1993/2004. *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Oxford: Blackwell Publishing.
- 三省堂編修所(編) 2000.『コンサイス・カタカナ語辞典』 (第2版) 東京 : 三省堂.
- 新村出 (編) 1998.『広辞苑』 (第5版) 東京 : 岩波書店.
- 田中真一 2007.「イタリア語の重子音と促音形成 : 位置と種類に着目して」『日本言語学会第134回大会予稿集』 252-257.
- 田中真一 2008.『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』東京 : くろしお出版.
- Tanaka, Shin'ichi. 2015. The adaptation of Italian geminates and vowels in Japanese and its relation to perception. Paper presented at GemCon 2015, Glasgow.
- 田中真一 2016.「イタリア語における日本語由来の借用語と韻律構造」日本音韻論学会(編)『現代音韻論の動向 : 日本音韻論学会の歩みと展望』開拓社.
- 田中真一 forthcoming.「パドヴァとヴェローナの韻律構造 : イタリア語由来の借用語における音節量・強勢の受入と音韻構造」田中真一・ピンテール=ガーボル・小川晋史・儀利古幹雄・竹安大(編)『音韻研究の新展開 : 窪菌晴夫教授還暦記念論文集』東京 : 開拓社.
- Tanaka, Shin'ichi. forthcoming. The Relation between L2 Perception and L1 Phonology in Japanese Loanwords: An Analysis of Geminates in Loanwords from Italian, in Haruo Kubozono (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants*. Oxford: Oxford University Press.